

特集「一読多読」

武田百合子『ことばの食卓』

私はあまり本を再読をする方ではないのだけれど、そういう私にももちろん例外はある。

特筆することも見当たらない、ささやかな一日の終わりに無性に読みたくなるもの、私の場合、それは武田百合子さんの一連のエッセイ集だ。

彼女の『富士日記』(中公文庫)は長いこと私のベッドから常に手の届くところに置いてある本なのだが、昨夜は『ことばの食卓』(画・野中ユリ、ちくま文庫)を書棚から取り出してきて、久しぶりに再読してみた。

思想・文化情況の〈現在形〉を射抜く
批判的視座を求めて

ラ・ヴュー
La Vue

No.12 (2002/12/01号)

発行人:山本繁樹
発行所:るな工房/黒猫房/窓月書房
大阪市東淀川区菅原7-5-23-702 〒533-0022
TEL/FAX 06-6320-6426
http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/index.html
E-mail:YI.J00302@nifty.ne.jp

目次

《3周年記念特集 一読多読》

- ◆武田百合子「ことばの食卓」……………内浦 亨
- ◆往還の湖——橋本康介「祭りの笛」覚書断片……………今野和代
- ◆マカール・ジェヴシキンという性格……………中島洋治
- ◆狂気なき狂気の現代——パタイユ「至高性」……………宮山昌治
- ◆ありふれた平凡な自分とありふれた平凡なコトバ……………安喜健人
- ◆アンケート「一読多読」
- ◆編集後記

No.13は2003/04/01発行予定です。

■無断転載を禁じます■



内浦 亨

「ああ。うまいや」……枇杷の汁がだらだらと指をつたって手首へ流れる。……一切れずつつまんで口の中へ押し込むのに、鎌首を立てたような少し震える指を四本も使うのです。……唇のはしに汁がにじみます。眼尻には涙のような汗までたまっています。

この描写のエロティシズムはなんなのだろう。まるで男女の交接の様子を物語っているようではないか。そうやって二個の枇杷を食べ終わった泰淳氏は

は、「タンと舌を鳴らし、赤味の増した歯のない口を開けて声を立てずに笑い」「長椅子に横臥して、枇杷の入った鳩尾に手を置いて、柔らかい顔つきになって、すぐ眠り始め」る。まるで赤子のよう

に驚くのである。そして、話は枇杷を食べる夫の描写から彼の手の形をめぐる追憶へと展開していくのだが、すでにそのとき、私は彼女の思い出とともにあることに

彼女の

文章を読みながら、私もまた座って「いる。どうということもない思い出……、しかし、そこにほつきかりと空いたすき間には、すでに禍々しいものが侵入していることに気づかされるのに時間はかからない。

向い合って食べていた人は、見ることも聴くことも触ることも出来ない「物」となって消え失せ、私だけ残って食べ続けているのですが——納得がいかず、ふと、あたりを見まわしてしまふ。

エッセイは次のように終わる。

ひよつとしたらあのととき、枇杷を食べていたのだけれど、あの人の指と手も食べてしまったのかな。——そんな気がしてきます。夫が二個食べ終るまでの間に、私は八個食べたのをおぼえています。

「二個の枇杷を」「四」本の指で食べる夫を「八」個の枇杷を食べながら見つめる百合子さんの姿、この倍々に増えていく数字が、なにか圧倒的でありアルな不穏さを、ある種の感動とともに私にもた

らす。とところで、彼女が、そして泰淳氏が食べていたのはほんとうに「枇杷」だったのだろうか？ それは別名「ことば」というものだったのかもしれない。

ナカニシヤ出版

叢書「倫理学のフロンティア」10
身体のエシックス／ポリティクス
——倫理学とフェミニズムの交点——
◆金井淑子・細谷実編 従来のジェンダー研究が棚上げしてきた「身体」という問題から生起する倫理を考える。2200円十税
◆安彦一恵・佐藤康邦編 風景とは何か。それはいつ誕生したのか。いま、哲学の立場から「風景」を問う。2300円十税

悲のフォークロア

海のマリコへ 大森亮尚 新聞の片隅にすら載らなかった人々の人生を照らし出す埋もれた人生民俗誌。1800円十税

緒方洪庵と大坂の除痘館

古西義廣 天然痘の予防と種痘普及に尽力した幕末の医師達を通して考察する洋学の普及。2500円十税

シルクロードニヤ遺跡の謎
中井真孝・小島康賢 約二千年前の木造都市遺跡の謎を解く。2500円十税

ウズベキスタン考古学新発見

加藤九許他編著 中央アジア・シルクロード仏教遺跡新発見出土品。2000円十税

仏教書と大阪の本の専門店
四天王寺書林
*小社直営。TEL06-6779-9531

【東方出版】 <税抜>
〒543-0052 大阪市天王寺区大道1-8-15
TEL06-6779-9571 FAX06-6779-9573

市民の日本語

NPOの可能性とコミュニケーション
加藤哲夫著 六九五円 参加型コミュニケーションが新しい市民社会をつくりだす。ひとと対話するために必要なことは、NPOのマネージメントから考える。

文化・インタラクティブ・アクション・言語

片岡邦好・井出祥子編 二八〇〇円 二〇〇一年九月に慶應義塾大学で開催された社会言語科学会ワークショップをもとに構成。文化間にみられる言語コミュニケーションの差異から、わたしたちとことばの関係性がみえてくる。

文化化とイデオロム化

秋元実治著 三六〇〇円 英語の文化化・イデオロム化を、マクロ的データに基づいて記述。理論編では文化化とイデオロム化のメカニズムを、分析例では、実際の言語現象を分析を通して説明。

かなり不揃いの起業家たち

熱い思いから寒いネタまで、ホンネ満載の自作メッセージ集——
■起業サークル来夢主宰 中尾吉宏編 本書は36人の起業家が綴った生きるための記録であり、それぞれの起業家の歴史でもある。これから起業を考えている人たちへあなたにたいエールを贈る。朝日新聞他で紹介される。1525円十税

こころのリミットをはずせば!

Your Best Year Yet!
——ジニー・S・ディツラー著 「自分にはできるわけがない」「そんなことは無理だ」……そんな消極的な考え(限界)を取り払い、「できる!」という自覚を呼び覚ます。1905円十税

アリーフ一葉舎
〒606-8203 京都市左京区田中関町26
TEL:075-705-0088 FAX:075-705-0080
http://www.8.ocn.ne.jp/aleaftop/

ひつじ書房
〒112-0002 東京都文京区小石川15-25-8
tel:03-5684-6871 fax:03-5684-6872
http://www.hituzi.co.jp (価格は税別です)

哲学はこんなふう

コント=スポンヴィル/木田元、他訳 誰もあなたの代わりには哲学する生きたるための哲学入門◆2000円

ユーザーイリュージョン

意識という幻想
ノーレットランダーシュ/柴田裕之訳 脳は私たちに欺いていた。意識という存在の大きい欺瞞性を暴いた力作。◆4200円

脳の方程式
ぷらす・あるふあ

中田力 脳はいかにして心を作るのか。「複雑系としての脳」から過理論を樹立。脳科学の新しいフロンティアを拓く◆1800円

自然のなかの絵画教室

布施英利 美は自然に学べ! 自然に触れあうことで美的感性は磨かれ、素晴らしい絵が描けるようになる。◆1800円

紀伊國屋書店

出版部:東京都渋谷区東3-13-11
営業tel03(5469)5918 表示価格は税別
http://www.kinokuniya.co.jp

いごばの

僥倖と不穏さにつ
きまわられた作家
の姿が目につかぬ。ふたりにとって、それ
は「どうということもない」日常でもあつ
たはずだ。そして、それに対する繊細な感
受性こそが、彼女を「天性の作家」たらし
めたものだったのだろう、と私は思う。

武田百合子さんのエッセイを読むと、
自分が文字どおり「いごばの食卓」に招か
れているのを感じる。ふたりの共著のタ
イトルを借りて、「めまいのする散歩」に、

といつてもよいだろう。彼女と食事をと
もにしながら、あるいは散歩をしながら、
私は幸福感とともに深い眠りへと落ちて
いく。★

■プロフィール(うちうら・とおる) 図書出版
「冬弓舎」(http://thought.ne.jp)代表。京都で細々
と人文書出版をおこなっています。十一月末に
ロラン・バルトの最晩年の講義(未公刊)に関す
る書籍「新生の風景」を出版予定ですが、彼の
講義はまるで武田百合子さんのように「書くこ
と」の幸せと悲しみに満ちたものです。ぜひこ
ろ読ませたい。E-mail: info@thought.ne.jp

〈新生〉の風景

—ロラン・バルト、コレージュ・ド・フランス講義—
原宏之著
四六判並製 236頁 本体1800円+税

バルトの最晩年に行われた講義の全容を本邦
初紹介。同時に彼の死後に残された「新生メ
モ」の謎に迫る。

〒606-8132
京都市左京区一乗寺馬場町10番地
冬弓舎 TEL & FAX : 075-722-3267
http://thought.ne.jp/

特集「一読多読」

往還の湖

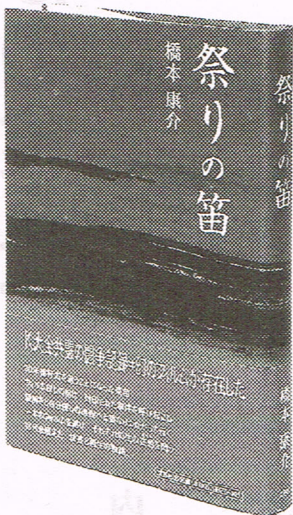
橋本康介『祭りの笛』覚書断片

1

遠ざかっていくもの。たとえば死者。た
とえば旅の車窓の一瞬の緑。遠い家。灯の
橙。横顔。声。しぐさ。あの時代。友。遠い時
間。記憶。もう取り返しのつかない遙かな
放物線。それらが突然、胸におちてくると、
強烈な色素のように浸透してきて薔薇の
火で染めあげる。最後の挨拶だよ。キリキ
リと沈黙の眼差しを送ってくる。

2

七〇年代 べにうまれた愚
かな思想 なんでもない花/おれたちは
流れにさからって進撃する/……/頭蓋
の窪地に緑の野砲をひっぱりあげる/さか
らうこと。ひっぱりあげること。すつくと
した投げやりのスピード感。わたしではな
くわたしたちという熱。おれではなくおれ
たちはという時、立ち昇ってきた未来へ一
気になだれこんでいけるような眩暈めい
た没落予感。国家。制度。党。コンミュニオン。



祭りの笛 橋本康介

巨大な抽象に生身の自我がぶつかって
くことの出来るまっぴるまの熱愛のよう
な熱病のような快感の中で生きていた。い
つか、ローザのようにドブの運河に投げ捨
てられる。そんなことは少しも怖くなかつ
た。ローザの好きだった雲と同じ雲が空を
走っていた。その無頓着な遠さとクールな速
度を愛した。

3

あれは仮装のわたしたち? 革命など
起こりはしなかった。そして今ここに
わたしたちは? わたしたちは?

いつも下らぬ武勇伝を話していた。た
かが、学生のチャンバラじゃないか、知

今野和代

つてるぞオレだって、あいつらはだ
っ子のように暴れて、何もかも途中
放っぼりだして、結局何もつくり出せ
やしなかつたんだ。

物語

『祭りの笛』はそこへむけてのひき裂かれ
るような往還の力学と緊迫のなかで、な
ぎ倒されそうになりながら「今」を立ち続
けようとする位置についていた。

公平、お前にとってあのフィルムが
どれほど大事なのかは知らない。けれ
ど俺にとってあのフィルムの時代と
は、六九年晩秋の逮捕迄の期間、二十代
全体のほんの短い一部、良き時代、ある
意味で夢の時代だ。その後の二十代本
番は未整理のまま放置して来たのだ。

そして隆士はあの「未整理のまま放置
してきた」A Z作戦の六九年九月を、物

アンケート「一読多読」

Q..いわゆる「良書」とは限らない、私
にとって決定的な影響を与えた本や想
い出深い本など、あなたのお薦めの本、
印象深い本三点を挙げてください。
A..書名・執筆者・発行所名・その本
についての簡単なコメント(コメントは
無くても可です)。(掲載は、入稿順で
す。)

■真島正臣

- 1 「アメリカに学ぶ市民が政治を動かす
方法」バリー・R・ルービン、日本評
論社
市民の意見を反映させられる政治参加は
可能か?—問題解決型の実践論が提示さ
れている。
- 2 「敗北を抱きしめて(上・下)」ジ
ョーン・ダワー、岩波書店
小泉構造改革には、日本の将来へのビジ
ョンがないといわれる。心情を共有できた
時代の日本人を再考する上で、戦後の歴史
から学べるあれこれがいまきと描かれて
いる。
- 3 「マイクロビジネス—すべては個人の
情熱から始まる」加藤敏春、講談社
リストラに逢い独立を検討している人な
ら読んで元気がでる。コミュニティ・ビジ
ネスなどの小さな起業を奨励する本であ
る。簡便で読みやすい。講談社+α新書のシ
リーズに入っている。加藤氏の翻訳本「市民
起業家」日本経済評論社、参照。

■Yanabiko

- 1 「現代の古典解析」森毅、現代数学社
解析学と代数学を接続した。
- 2 「歴史の進歩とは何か」市井三郎、岩波
書店
人間とはなにか、を問うた。
- 3 「構造主義生物学とは何か」池田清彦、
海鳴社
科学とはなにか、を問うた。

■黒崎宣博

- 1 「文化のフェティシズム」丸山圭三郎、
勁草書房
一九八九年。私はこの本を読んだのがき
っかけで、読書、研究の世界に足を踏み入
れ、しまった(決定的な影響を受けた)。

■鶴飼雅則

- 1 「中野重治詩集」中野重治、岩波文庫
他
歴史と社会についての新しい視点を獲得
できる。全面的に正しいか否かは別にして、
一人でも多くの人に読んでいただきたい本
である(印象深い。お薦め)。
- 2 「ビッグル号の3人—艦長とダーウ
ンと地の果ての少年」リチャード・
L・マークス、白揚社
宗教と科学、未開と文明が交錯する数奇
な物語(印象深い。お薦め)。

■S・H

- 1 「共同幻想論」吉本隆明、角川文庫他
現実の捉え方を示唆してくれた。
- 2 「かもめのジョナサン」リチャード・
バック
夢と勇気を与えてくれた。
- 3 「パン屋再襲撃」村上春樹
戯曲なのか小説なのかボーダーレスな空
想小説。

■國岡克知

- 1 「心のおもむくままに」スザンナ・タ
マール、草思社
めずらしく二回も熟読してしまつた本。
いろいろ考えさせられた。ベストセラーと
はどうやって作られるものなのかを研究し
ようとして読んでいたうちに、すっかりこ
の本の世界にはまった。
- 2 「整体入門」野口晴哉、ちくま文庫
体癖という著者の考え方が以前から気に
なっていた。おもしろい。
- 3 「さらば、わが青春の少年ジャンプ」
西村繁男、幻冬社文庫
編集者の原点を知りたい人には絶対おす
すめ。熱く爽やかな読後感。本宮ひろ志の
『天然まんが家』もあわせて読むと面白さが
倍増する。

■岩田憲明

- 1 「精神指導の規則」デカルト、岩波文
庫

パセリ市場

今野和代著

A 5 判上製 98頁 本体2400円+税 思潮社刊

空の空を撃つ、魂のゲリラ。混沌を切りぬけ見出すさらなる混迷、または断絶。それを著者は、魅力的な舌で健康な刺激に転移するのだ。15年にわたる困難な燃きを全開する、斬新な第一詩集 (1996年)。

詩集『BLUE SKY』、2003年1月韓国にて出版予定。

語によって連れ出され、もう一度生き始める。一九六九年、ブントから分裂し、革命戦争を宣言した組織。大阪戦争、東京戦争を経て、首相官邸を占拠し、警視庁襲撃の直後に、人民政府樹立を世界に高らかに発信する作戦に撃つて出る為の爆弾闘争「前段階武装蜂起」に突入していった組織。その軍事訓練に結集した中枢部隊が、ついに未遂のまま大菩薩峠で逮捕される。その前夜の五十三名の中の一人の隆士の日常と内部に、そして二十八年後の今を生きた隆士の沈黙の坩堝に、しだいにズームアップしていく執拗なカメラアイによって、切れ切れの言葉が立ちあがってくる。

自分のその後の「A Z作戦」の駆け抜けるような行程も、逮捕や公判での半端な態度も、一切自分以外のものにその責任があるのではない。また結局はその後多くのものを棄てて来たことも明らかだ。

また美德と思えた「度量」それ自身によつてか、組織は敗走を重ねその内部から音を立てて崩れて行った。紙一重で誠実にも暴虐にもなる、人間集団に潜む力学を軽視する危うい楽観が、やがて奇異な合体を経て凄惨な結末を迎えたことは誰もが知るところだ。

繁栄が秘めていた魔力と、闘う者の集団に潜む力学。その両方に足元をすくわれ、自他の無力と傲慢を手ひどく

思い知らされたのは自分だけではないだろう。

だがあの時、この組織の戦略戦術・理論や思想をトータルに支えている「根本精神」への信頼と、棄てるまいという思いが五重の塔へと向寄せたのだ。

棄てるまいという思いゆえに、「根本精神」への信頼を胸に「A Z作戦」に参加する？ 何という心のカラクリだろう。

「血で

書かれたものだけを愛する。」と言ったのはツアラストラ、ニーチェの分身。血をもって書かれたもののみが精神であると。書くことも、読むことも「耐えるに難い人生」のなかで次第に風化し拡散し、やがて、精神までも呆け、悪臭を放ち始める。だから血を流し続けて書かれたもののみが精神の歩行を許される。誰に？ 神に。いや。橋梁を越えて行こうとする精神に。そしてその時の精神とは何と厄介なものだろう。

だが隆士にはジュンとミツが重なり、その日以来いつも分身のように自分の中に存在している。……ミツのようにオロオロしながらジュンのように一人立とうとする者たち、その組み立て方を掴めずうごめく者たち、彼らと自分自身への応援歌……それがその時の隆士にとっては、五重の塔下へ戻るということだったのだ。

そしてそこから物語はさらにひとりの登場人物、その日ついに塔に帰らず「A Z作戦」から引き返して行った増本(岩田)清明を浮かび上がらせていく。「今なら理解できる」「あの日、五重の塔へ戻ったのが増本であり、戻らなかったのが自分であつても何の不思議もなかった」もうひとりの自分という隆士のモノローグを通じて。

本来革命はそれを必要とする人々が、自らの生活と尊厳を守るためにこそ立つ結果であり、決してその守るべきものを破壊する為にあるのではない。また、プロレタリアートというものがある、どのような形でこの国に生きていくのか自分は理解していなかった。「労働者諸君」などという言葉が学生が発することの茶番を、誹謗中傷の為ではなく自戒の為に理解する、そのことがそのときは出来なかった。……そうした発想に基づいて語られる「革命」と革命されるべき社会や人々の生活との落差を見てきたはずの増本は、最後まで逡巡しそして引き返したのだろう。

日本中が

テレビの画面に釘付けになり、

そして多くの学生たちが衝撃と驚愕と失意のない混じった未整理のまま、学生運動から引き返していくことになった強烈な一九七二年二月の冬の記憶。赤軍派中央軍と京浜安保共闘人民革命軍の合同組織連合赤軍の浅間山荘での十日間にわたる銃撃戦。死者警察官二名、一般人一名。

読多読

- 中塚則男
 - 1 「私」のメタフィジックス『永井均、勁草書房』
 - 2 「脳とクオリア」茂木健一郎、日経サイエンス社
 - 3 「私」という演算『保坂和志、新書館』
- 野原 燐
 - 1 「無限と連続」遠山啓、岩波新書
 - 2 「吉本隆明全著作集13巻 政治思想評論集」吉本隆明、勁草書房
- 高橋秀明
 - 1 「比較転向論序説」磯田光一、勁草書房

学問の用不用を教えてください。特に、経済学者にとって必読。

- 2 「道徳形而上学原論」カント、岩波文庫
- 3 「多賀墨卿にこたふる書」三浦梅園、三浦梅園自然哲学論集、『三浦梅園集』、共に岩波文庫

根源を問いつける哲学の現場が見えてくる本。

■ひるます

- 1 「意味と生命」栗本慎一郎、青土社
- 2 「文脈病」斎藤環、青土社
- 3 「プラトン入門」竹田青嗣、ちくま新書

「オムレット」を作成する上で、決定的なコンセプトとなった「コトの創造」という着想をこの本から得た。モノの構造における部分と全体という発想にとどまる暗黙知理論を「コトのリアリティ」という観点によってプレイクスルーしたと、今にして言える。

争があつた。その直後に読んだので余計思いついた。深い。

- ☆「ある無能兵士の軌跡(全9巻)」彦坂 諒
 - 1部「ひとほどのようにして兵となるか(上・下)」創樹社
 - 2部「兵はどのようにして殺されるか(上・下)」創樹社
 - 2部別冊年表「兵はどのようにして殺されるか」創樹社
 - 2部別冊「戦島1994」創樹社
 - 3部「ひとほどのようにして生きのびるのか(上・下)」創樹社
- 最終巻「総年表 ある無能兵士の軌跡」創樹社
- ☆「火山島(全7巻)」金石範、文藝春秋

上下段びつり詰まっているので読み応えがある。一巻だけ読んだが、かなり面白い、と思う。

高校生のときに学校図書室で偶然手にして、「文学」というものに開眼させられたような気がしました。曰く、「純粋客観としての存在の世界を二次的なものとし、主体との関わりにおいて意識された存在に真のリアリティを認めるのは、あらゆる観念論の(あるいはロマン主義の)基本原理である。しかし、それが近代的な実在論の観点から見れば、それは不合理にみえようとも、やはりそれは人間の根源的な生き方に深くつながっているのである。人は科学の進んだ今日においても死者の墓を建てることをやめはしない。死者がすでに非存在である限り、死者への礼拝は明らかに架空のものへの礼拝であり、それは非合理的な所業であるというほかはない。と同時に、それは人間が生きていく上に、架空の原理を必要とするかを鮮やかに物語っているのである。二十世紀の人類は、死者の肉体を肥料に使う最も合理的な態度を身につけようとしたか。しかし、今日、私たちは「墓」の人間的なリアリティを否定することができるとは思えない。序論・問題と視点」の中の一節ですが、この一節が、トラウマのように心



るな工房／黒猫房／窓月書房

自費出版等のご案内

◎ご希望の造本で製作致します◎

るな工房／黒猫房／窓月書房では、自費出版(詩集・歌集・特装本・限定本・記録集など)から商業出版まで、編集・製作・DTP・装幀・デザインなど出版全般のお手伝いを申し受けます。お気軽に、ご相談ください。

TEL/FAX:06-6320-6426
大阪市東淀川区菅原7-5-23-702 〒533-0022
http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/koubou.html

その時、そのただなかにいるしかなかったわたし。わたしたち。それがその時の生きているただななであったから。その中に流れていた光も震えも空洞も栄光も失態もそのままの断片として手練り寄せること。その集積をモニタージュしていくこと。その断片が断片として、問い、問いかけ、応答していく、そのせめぎあいと共震と集積からたちあがってくるものに向かいあうこと。

「あれだけなんですって、あの暑く遠い夏の圧力の中で自分たちで仕切ったのは。闘っていた、本気だった、って。……」

妻百合子の声による死者田所公平の言葉。胸の裏に畳み込みながら、晒されながら、菜苗も隆士も増本も教授も久仁子も吉田も百合子もそれぞれの生の一回性を生き始める。そこにもうひとり、死者水島丈一郎の泣き笑いのような声がかぶって来る。

「即興や、即興。計算なんかしていない。想い付き……で、こいつ俺の争議のとき続けて何と言うたと思う? 『全共闘を二度やってみようねん』ってぬかしやがった。会社が練り出した暴力とやり合って職場占拠してる時にやで。こっちはな、何なら死ぬまで何回でも全共闘やったらか思うてるんや。最後までポロポロになるまでやったらか、クソッ!」

文闘委の進退極まりない窮極のピンチを少しもひるまず、動ぜず、瞬時に人の琴線のを震えを驚掴みにして、状況を逆転に切り開いていった男。あの日々の「情熱と呼ぶにはどこかさん臭く、政治と呼ぶにはお粗末な、自らの詭弁を充分承知していた」ような男。倒産した会社を自主運営していく火の車の中で、フィルムを五百

人間が 流してきた夥しい負と自負と思いがりもたらした夥しい犠牲。そしてそれら累々と続く屍と無念。

万で売却し、連日の酒びたりの挙句、母子家庭の親子の深夜のアッシーの途中でさつさと事故って死んでいった。菜苗にこつそりと幻のフィルムのコピーを託して。

水島

水島を死者とすることでこの物語のなかに生き続ける。満身創痍をものともせず、どこか飄々とトッポイ大酒飲み水島がわたしのなかにするつとやってきて「……最後までポロポロになるまでやったらか、クソッ!」といいながら近づいてくる。

「祭りの笛」のもっとも美しい好きなシーン。K大全共闘の闘争記録終了後の二十秒後に立ち現われてくるK大裏の崖の、当時新入生であった菜苗が撮った思いがけないシーンを発見することから始まる場面だ。誰かが撮ったであろう六八年晩秋映研ロケハンのフィルム。六九年春の田畑シーン八の少年が次々と映し出されていく。二十八年の歳月。いかなる時代の風圧のなかにも色褪せないでそこにあった珠玉のような記録。沈黙の断片。そして、この物語が、幻のフィルムを巡って奔走し、邂逅し、ついに手にしたその菜苗自身が自らに出会う軌跡であったのだと気づかされる。

遠い春湖に沈みしみづからに祭りの笛を吹いて逢ひにゆく (斉藤 史)

この物語そのものが「祭りの笛」なのだ。公平の声。「表現は表現や。表現は何か支配する為の道具じゃない。逆に誰かが表現を牛耳ることを決して許してもいいかん。もし、僕たちの表現活動が無効であってもし、僕は一向にかまわん。……表現するというのは、……社会的な役割を果たせないうという、その悲哀に耐えることや。」菜苗はすつくと立ちあがるだろう。笛を吹きながら湖を背に歩き始めるだろう。菜苗はわたしでもある。わたしもまた、新し

中に刻み込まれたためか、今も、「ロマン主義」を蔑称のごとくに用いる思想の言辞にはあらかじめ不信感を抱いてしまいう僻見からどうしても自由になれないままです。

2 「吉本隆明全著作集」吉本隆明、勁草書房

大学生のときは、吉本隆明全著作集ばかりを繰り返し読みました。一番最初に読んで目からウロコが落ちたのは、「文学と政治」という問題のはざまに「想像力」というものをどう理解して良いのか途方に暮れていた折りに「文学論I」の中の「想像力派の批判」を読んだときです。概念とも感覚とも違うイメージの構成力を想像力と呼ぶべきだと書かれている箇所、目からウロコが落ちたと思えました。曰く、「存在が意識されたものだとすれば、イメージは仮構の存在についての意識であるか、存在しないものについての意識であるかははない。しかし前者はいわば仮構力とよぶべきものであり、後者は必ず存在しないものについてのイメージはおこりえないことからそれ自体背理にはかならない。わたしのかんがえでは、想像力はたんにサルトルのいうように非実在物を存在するかのようにかんがえうる力ではなく(それは空想力または仮構力である)、じぶんの意識にとつて矛盾であるとかんがえうる意識の能力をさしている。【中略】想像力は不変ではなく、(不変なのは意識の仮構力だ)もしも社会的疎外がなくなるとすれば、対象の人間化という意識活動のなかに消滅するか、あるいは、まったくちがった意識の総合作用としてのこるはかはないのである。」

3 「わが驟雨・永島卓詩集」永島 卓、永井出版企画
社会人になって、学生時代から好きだったこの詩人の詩集を、万引きなどではなく、ちゃんと買うことができるようになりまし。た。「かわらぬ意識の土地で立つ/幻の土器を追う/鮫橋を/かならず渡りきる」という一節ではじまる「鮫橋」の詩編をはじめとするこの詩集にどれだけ鼓舞されたかわかりません。詩篇の続きは以下のとおり。「硬い驟雨で洗いきれぬ/日常への重い惨劇を/沈黙しつづける出崎で/一途に迎えながら/影の終着駅で凍結するのだ/死魚たちの群れが/夜の膨らむ川から這いあがってくる/鮫橋が組む坂の論理を/一斉に解体しようとするれば/坂をこえる位置からも逃れることができぬ/散乱した土器の迷路

で/青い亡姉が空を包みながら/風景の皮膚へ触れると/軒並みひしめく家系たちが/声もなく悲鳴をあげて/ふるさとを焦がすのだ」

1 「風車小屋だより」ドーデ、岩波文庫
ワケわからないなりに陶酔した若き日々。

2 「自転車野郎世界を行く」浜村紀道、秋元文庫
コテコテの青春冒険ロマンに憧れた若き日々。

3 「シユマリ」手塚治虫、講談社
手塚マンガとしての完成度はイマイチだがなぜかひかれた。
番外 ああ、ほかにも挙げたいなあ。「高熱随道」吉村昭、新潮文庫とか、「八甲田山死の彷徨」新田次郎、新潮文庫とか……。そう考えると、この3点がベストスリーというわけじゃ決してないんですが。

中津雅夫
1 「大菩薩峠」中里介山、角川文庫
たしか二十九巻だったと思う。高校生のときはやたら大長編ばかり読んでいた。これ以外は白井喬二「富士に立つ影」、直木三十五「南国太平記」、吉川英治「三国志」「宮本武蔵」など。ついでに長編というそれだけの理由で島崎藤村「夜明け前」も。読む時間は主に汽車+電車の通学途上。母親から「T君はいつも豆單の暗記や数学の問題を解いているのに……」と落ちこぼれ宣言。まさに人生を決められてしまった本といえる。

2 「鮫の道」(「本所しぐれ町物語」所収) 藤沢周平、新潮文庫
一九七四年に続いて一九九八年(五十六歳)に二度目の心臓手術のため入院。一時間あるいはひよつとして十分後にはほっくりと逝くかも知れない、とにかく生きていううちに物語は終わって欲しい、そう思うと短編しか読む気がなくなつた。藤沢周平の小説はほとんど読んでいたが、短編は避けていた。鮫は同じ道を二度と通らぬところから「鮫の道切り」という。お見舞いに来ていただいた人と別れるさい、常にこの言葉の思い浮かべ、これで二度と会えぬかも……ともういちど振り返るのであった。

3 「透谷全集全三巻」勝本清一郎編纂、校訂・解題、岩波書店
私にとって、生涯をかけて真向かうべき

いわたしの祭りの歌をうたわねばならぬ。
い。

*「祭りの笛」橋本康介著、二〇〇二年一月一五日発行、文芸社、価格二二〇〇円

特集「一読多読」

マカール・ジェーヴシキン という性格

中島洋治



マカール・ジェーヴシキンというのは、言わずと知れたドストエフスキの『貧しき人々』の主人公でないが、十代の頃、新潮文庫版(木村浩訳)のこの本を手にとりて読み始める。と、止まらなくなった記憶がある。初期ドストエフスキは、ヒューマンスティックな作品を書いたと言われることが多い。そして『地下室の手記(地下生活者の手記)』という作品を経て転回がなされ、後期の作品、特に五大長編に至って彼独特の哲学的思想が深化され、人間の深層に迫るという解釈をよく聞かされたものだ。こうした解釈は、ドストエフスキを世に送り出した批評家、ベリンスキのものに沿っていったと言えることができる。もともと、最近の評論では複雑な読解がなされているようだが、残念ながら詳しいことは私は知らない。

■プロフィール(こんの・かずよ) 詩人。集合体「ペラゴス」会員。雑誌「イリプス」共同探求通信編集スタッフ。二〇〇一年六月ドイツハンブルク「アルトナ芸術祭」、二〇〇二年五月大阪西成ジャンジャン横丁「マサハウス」、八月神戸三宮「カルメン」、「ロルカ詩祭」などで詩朗読。詩集「パセリ市場」(思潮社)

では、『貧しき人々』がヒューマンイズムに溢れただけの作品かというところ、そうとばかりは思えない。確かに、この作品をめぐり込んで読み進めると、ジェーヴシキンとワルワラの互いの想いが強く伝わってきて、最後の別れの部分では涙が流れてくることも白状できる。

ドストエフスキは一八四九年に死刑宣告を受け、刑場で銃殺される寸前に特赦を受ける。その後シベリアへ送られ、「ナロード(大衆・民衆)」と接触するのだが、その体験が後の作品に多大な影響を与える。この体験は後期作品の根幹の一つをなし、ロシア正教、つまりイエスキリストへの信仰や希望、愛に深く転化し、さらに自らが若いころ傾倒していたユートピア的社會主義への批判にもつながる。しかし、後期作品でもユートピア的社會

への憧憬は、ロシア正教(イエス・キリスト)を抜きにしては語れないものである。うけれども、消えていまいと思われる。元来貴族階級に属する彼の書いた初期の作品は、観念的な部分が強く押し出されている。それに対して後期の作品は、彼自身の「死」の強烈な意識や「ロシア的なナロード」の「発見」を通して得た体験が彼を規定することになる。しかしまたそれと同時に彼固有の観念的な思考も後期の作品には混在している。

『貧しき人々』の次に書かれた作品は、『分身(二重人格)』である。この作品への彼の愛着は後々までずっと残っていたと伝えられる。そして、この二つの作品の連続性は明瞭に読み取れる。少し身を引いて読んでみると、うだつのあがらない小役人であるジェーヴシキンは、異常なほど周囲に気を使う人物だと分かる。他人の目が気になって仕方がないのだ。『分身』の主人公ゴリヤートキンも小役人で、同僚等の視線が気になって仕方がないタイプだ。二人とも、職場では静かに仕事をして、顔を上げるのも恥ずかしいと思ってしまう時があるような人物たちである。自分の家においてさえ周囲を気にする。それでいて自尊心が強く、善良なる市民であり人様に後ろ指をさされるような人間でないことを誇りに思っている。

まず、ここで注意したいのは、二人とも共通して非常に独語的、モノローグ的な性格であることである。『貧しき人々』の場合は、それは「書簡」という形で明らかに表れており、ゴリヤートキンもモノローグ的に語ることが多い。またその後の作品でも、『地下室の手記』は典型的にモノローグ的だと言えるし、後期の五大長編に登場する人物たちも独語的な語り方の要素は依然として続いている。さらに興味深いことに、注意を引かれるのは、そのモノローグが対話的、ダイアローグ的でもあるという点である。これは、ドストエフスキ自身がそのよくな、いわば「分身」的な人であったのではないかと、私に思わせる。つまり、独語

ひとと思ふ。

■上倉庸敬

1 「奇譚クラブ」(雑誌)、晩書房
性が五十歳をこえても生の大きな問題になっていないだろうか、子どものわたくしに予想できたはずありませんでした。

2 「春夫詩鈔」佐藤春夫、岩波文庫
詩の、というよりもむしろ一般に悦楽というものをおぼえた始めです。

3 「砂漠の隠者」シャルル・ド・フォーの生涯
著者も、訳者も、出版社もおぼえていません。二十世紀になってから亡くなったフランス人カトリック修道士の伝記です。内容はほとんど忘れましたが、人間にはあるべき姿があるということを示された感動はいつも鮮明です。

1 「デミアン」ヘルマン・ヘッセ、岩波文庫
これを読んで、万年学級委員長から不良少女に。

2 「歴史について」小林秀雄対談集「小林秀雄、文春文庫」
表題の江藤淳との対談における発言。「宣長の間違いを正したら宣長ではなくなってしまう。宣長は大へん偉かったから間違ってた、そういうふうに見ればいいんだ。じゃ、どう偉かったから、あんなったのか、ということが僕にうまく書ければ、あの人は間違わなかったことになるんだ。それが生きた歴史だ。」に深く感銘。以来ヒデオイヤンに。

3 「なぜ書きつけてきたか」金石範・金時鐘、しつづけてきたか
平凡社
在日を相対化して考えられるようになった一冊。

■山口秀也
1 「バイトくん(全3巻)」いしいひさいち、プレイガイドジャーナル社
中学時代「ブガジャ」で知り、腹が振れるほど笑った。でも、いまこれほど笑えないのはなぜだろう。

2 「ラビンス」ひさうちみちお、ブロンズ社
これも中学時代。「ジュネ」が懐かしい著者初の単行本。クノッブフなどの幻想絵画やコクトーに興味を持つきっかけになった。

3 「地球の午後3時」さべあのみ、サンコミックス
彼女のすべてがつまっている単行本。ペンネームの由来はなんだっつらう。

1 「携帯市民六法」責任編集・渡辺洋三 編集委員・小川政亮等、実業之日本社、一九七六年
市民運動に役立つと思われるものを収録した法律全書。絶版。こういうものを、もう一度刊行して欲しいという願いをこめて選。

2 「市民の暦」小田実・鶴見俊輔・吉川勇一編、朝日新聞社
いわゆる365日事典。きょうは何の日かのテーマは、市民の視点から選ばれていた。現代史を学ぶには好著だった。絶版。これも誰か編集してくれないかなあ。

3 月刊誌「未来」未来社(発行)ただし、西谷能雄が社長をしていたときで編集長が松本昌次だった全号
一九七〇のある時期、この小冊子を知り、バックナンバーを全部取り寄せた。一、二冊欠けた程度で、ほとんどを入手(数十冊)。松本昌次執筆による編集後記を全部読んだ、たぶん。これを読んでいなかったら、ヒントブックを興さなかったかもしれない。

■山田照子
1 「冬物語」南木佳士、文藝春秋
ヒントブックは無店舗書店です。えっ? 無店舗。そうなんです。いわゆる店がないんです。店があ? だから、我慢じゃないが、万引きは一度もされたことがありません。立ち読みもできません。レジンなんかないんです。お客さんに「カバーはどうないますか?」と訊ねたことが一回もないんです。まあ、「店番」という役割がないんです。

私の楽しみは、お客さんが注文した本が入荷したとき。重いダンボール箱を開けると、きょうも何か発見できそう……。表紙やタイトルはそれほど惹かれなかつ

一読多読

的な対話を通して、場合によってはそれを作品にそのままの形で表出させながら、作品を作り上げていったのではないか。ただ私は、ドストエフスキー自身とその作品の登場人物がどれほどの深さで関連していたか、ただ推測することしかできない。まして私はロシア文学者でもドストエフスキー研究者でも何でもない。しかし、少なくとも彼が作品に登場させる人物はどのように語ることが少なくないのだ。また、彼についての伝記的な話を読んでも自身の内面への没入がとて強い人間であったことが分かる。『カラマーゾフの兄弟』のイワンは自分の分身と対話をする。有名な「大審問官」のくだりは、イワンとイワンの(分身の)対話とも言える。

『罪と罰』のラスコーリニコフは、自分の中で独語的に対話しながら「壮大な」理論を構築していく。

もちろん

「思考」というのは自身との対話を含んでいる。例えばプラトンはアリストテレスもアウグスティヌスも、いわゆる「思想家」とも呼ばれるべき人々は自身との対話を通してその思想を形成していった人たちであるし、我々もまた内的に「話をする」。ただ、ドストエフスキーがその内的な独語と対話を用いて、時にはありのままと感ぜられるほどの表現で、小説という「作品」を生み出したことは間違いないと思われる。もう一つ注意すべき点は、ドストエフスキーの登場人物の現実と夢の境が、時に読む者にとつて分からなくなってしまうという点であるが、これについてはここでは余り触れないことにしよう。

ところで、ここで取り上げようとしている作品は初期の『貧しき人々』である。私がいわゆる「世界の名作」にまともにも触れたのはこれが最初だったかもしれない。それまでとつつきにくく難しい顔をしていられると思われた「世界の名作」が、これほど感動的で胸に迫ると実感できた、恐らく最初の小説ではなかったかと思う。そのとき自分が、冒頭に述べたような美し

さやヒューマニスティックな側面だけを感じたのかということも、今一度考え直したいと思つたのである。そして、連続性の感じられる次作の『分身』も視野に入れたかった。

これらの

主人公二人は、一方で周囲の目を気にする非常に神経質な人間であり、一方で自分は悪いことをしないと信じる、貧しくも善良さに誇りを感じている人間である。ジェーヴシキンもゴリヤートキンも、卑下の言葉と誇りの言葉の交錯が甚しい。しかし、ジェーヴシキンは、自分が非常に窮乏に陥ることによってその誇りから、いや、誇りや自尊心を持ちながらも次第に自己否定への道を進まざるを得なくなる。そして、ワルワラという美しい娘に全般的な愛情を注ぐようとし、それによって誇りを保つことを自身に課しているようにさえ見える。

ジェーヴシキンは、自己卑下と時には高慢とも言える感情、あるいは自己肯定と自己否定の間を作品の中で一貫して揺れ動きながら生きていく。まるで二つの両極に引き裂かれていくようである。それは『分身』のゴリヤートキンも同じである。そして、この心の揺れ動き、引き裂かれ、分裂性は現在の私の胸にも突き刺さる力を持つている。

ドストエフスキーは後期に至っても、その揺れ動きや分裂性を描くことを捨てていない。それは、先に述べた言い方をすれば、独語的な対話を繰り返す登場人物たちがそうなのである。初期の二つの作品では、この揺れ動きや分裂性の結果は破局的である。救いを見い出そうとしても難しい。これは後期の、例えば『罪と罰』のラスコーリニコフや『カラマーゾフの兄弟』のドミートリー、あるいは『長老とアリョーシャ』には当てはまらないだろうけれども、むしろゾシマ長老は既に希望を生きる存在として描かれているように見える。それにしてもゾシマ長老は例外的であり、多くの登場人物から私はいわゆる揺れ動きを読み取ることがで

きる。『罪と罰』というタイトルが表示されているように、初期の作品と後期の作品の連続性の一つに、このような揺れ動きを読み取ることができるとはならないか。自己否定と罪、自己否定と罰である。『罰』は救いが遥かかなたにせよ見えてくる言葉でもあり、自己肯定の遠い声がソニーヤの存在とともに囁かれる。

人間の記憶とは必ずしも信頼できるものではない。しかし『貧しき人々』が、当時それを読んだ私に強く突きつけた大きな力の一つは、この分裂性だと確信が持てる。なぜならこうした感覚は、今も絶えず私の底に流れ続けているからである。若い頃に読んだ本が読む者に強い印象を残す、その力の一つに読者という存在者の深くにある規定を掘り起こすことがあるという点、そのことを私は、『貧しき人々』で私自身が抉り出される形で見出していたのだと思う。当時はそれは漠然としていた。しかし今は、そのイメージが目の前に存在しているかのように見ることが出来る。

最後に

付け加えておこう。本来的に私は私のことしか書けない。だが、もちろん誰もこんなことを考えないとは思いますが、以上のように述べてきたことで「作家」という存在が普遍性を持つていないことを主張したい訳ではない。むしろ作家が個人という最もローカルな存在と人類や世界という非常にな広がりを持つていいることを、同時に述べているつもりである。ドストエフスキーは癩癩という持病のために死を強く意識せざるを得なかった。また死刑寸前という激しい体験、いわば「限界状況」を体験した。彼の書く人物は社会から外れた者が多く、彼はその存在に非常に敏感であった。彼は確かに、例えば現在の民族問題を知らなかった。その上でシベリアを描き、ロシア正教によるユートピアを夢に描いた。しかし、私は彼独自の視点で最もローカルな存在と言えぬ個の人間に注がれていたことを疑わないと同時に、

たけれど、ちょっと開いてみた『冬物語』。書き出し一行目に「不定愁訴」の文字があつて、ドキッ!

そのまま読み進む。「めまい、のぼせ、ふらつき、いらいら、頭重感、……」三年前、医者になつて十五年目、三十九歳の秋に痛烈なしつぱ返しを受けた。ある朝、病棟の回診に出かけようとしたら、不定愁訴が束になつて襲いかかつてきた。動悸、めまい、不整脈、冷や汗……。病名は恐慌性障害(パニック・ディスオーダー)。うつ病によく似た心の病であつた。

著者の南木佳士は心の病とつきあいながら、人間の、むきだしの弱さから目をそむけなるとなく、淡々と人生の切なさ、悲しみ、喜びを繊細な気持ちで綴っている。体力に余裕のある若い人には、この本に書かれてあることは理解できないかもしれない。でも五十五歳になつた私の心情にはびびりだ。

2 「転がる香港に答は生えない」星野博美、情報センター出版局

私は忙しい毎日を送っている。そう他人をされる。想像力の欠如である。どんなに忙しい毎日を私が送っているか、想像できないのである。

私は朝五時に起きる。それから明石公園まで自転車に乗り、公園の入口に自転車を置き、散歩する。夕方にも体力が残つていれば、もう一度散歩に行きたい。これは願望である。

私は夜十一時には眠る。そのようにして六時間睡眠を保っている。私のライフスタイル(生活習慣)のうち、睡眠に関しては守られている。さて、昼間はヒントボックスの仕事をしている。昼寝をしていられるのはと想像してはいけない。想像力はほどほどでなくてはならない。仕事熱心なあまり、本を読む時間がほとんど取れない。悲しい。だから私は「あながき」や「まながき」を短時間で読む。中は、ちよるちよると読む。これを繰り返す。だからどの本にどんなことが書いてあつたか、こんがらがつて思い出すのに苦労する。単なる加齢による記憶力低下現象かもしれない。

た。私にはあの街が必要だつた。「たまらなくあの雑踏の中に戻りたくなる」星野にとつて、香港は刺激的だつた。私にとつて「あながき」は刺激的だつた。

3 「笑う敬語術」オトナ社会のことばのしくみ「関根健一、勁草書房

最近ちょっと気になる言葉「苦勞さま」。ハンカチ片手に握りしめ、三者懇談とやらで中学校まで。先生と対面するや、「暑い中、ほんとうにご苦勞様です」と、先生は「深々とまではいかないが、軽く頭を下げてご挨拶。

今年の夏はホンマニ暑かつた。だから「暑い中」そこまではソノトオリ! でもねえ二十代のお若い先生に、五十代の年配者が「ご苦勞さま」とねざらわられても、ね!。中年太りになつたといえどもその脂肪をかすかに上回る敬語が、汗とともにじわーと出てくるではないですか!。そもそも「ご苦勞」というのは、上の者が下の者をねざらうときに使われてきた言葉である、オッホ。そのことを年配者はよく知つてい

る。時代劇なんかで殿様が、「うーん、ご苦勞であつた」とかなんとか言つてあんざりかえつていられるシーンを見たことないかなあ。まあ、私が先生よりわかしく見られたんならウシシシだけ……。

人間関係に上下関係を持ち込むのはよしましよ。では、何と言えはいいのかな? 「お疲れさま」くらいでどうでしょう。と、まあここまで書いて、私の敬語に関する敬語ソースは「笑う敬語術」であることとをバラしておきましょう。

著者の関根健一さんは「あながき」で、敬語の「マニニアル本はあまた出ているけれど、うつつとういふ文法論と辛気臭い精神論ばかり。ならば、文法用語は極力避け、理論的厳密さよりわかりやすさを、道徳と人生訓の代わりで冗談と与太話を、ということとで出来上がったのが本書」とあるとおり、笑つて読ませてもらいました。

■S・K

1 『第三の性』森崎和江、三一新書

2 『女遊び』上野千鶴子、学陽書房

前二冊は「男」との関係に行き詰ましている「あなた」に、解決の扉を開く本。「第三の性」は一九六〇年代にはこの本しかなかった。その意味で、感謝を込めてリス・アップ。「女遊び」は言わずと知れた上野千鶴子さんの本。さらに、理論として明確になつてる部分があつても、いまでも古

その視点が今後の世界、その世界に住む我々に問題を突きつけてくることも疑われない。もっと簡単に言えば、『貧しき人々』等の登場人物の身分的な人間がこれから現れ続けるだろうと予感している。そして私は、奇妙かもしれないが、そのことに

特集「一読多読」

狂気なき狂気の現代

——バタイユ『至高性』

二十代のはじめ、私が茫漠と信じていた陽炎のような世界観が突如崩壊した。その契機はよくあるような蹉跌にすぎないが、いったい何をしてよいか分からなくなった。そこで実行とはゆかなかつたのが私の愚かさだが、なんとか書物の博搜によって答えが見つかると思つたのだ。この時、一つの光明として見出したのがバタイユの『至高性』(人文書院)であった。バタイユは自らの精神の崩壊を救うために『眼球譚』(二見書房)を記したというが、私がバタイユに牽かれたのは作品から透けて見えた崩壊の危機と狂気にあつたのだろう。

純然たる幸福

ジョルジュ・バタイユ著
四六判上製 388頁 本体2900円十税

フランスの思想家ジョルジュ・バタイユが第二次世界大戦後に発表した論考及び対談の選集。待望のヘーゲル論ほか「無神学大全」第4巻「純然たる幸福」関係論文など、未邦訳重要論考17編を収録。

人文書院

〒612-8447 京都市伏見区竹田西内畑町9
TEL: 075-603-1344 FAX: 075-603-1814
http://www.jimbunshoin.co.jp/

希望さえ抱いているのである。★

(新潮文庫版「貧しき人々」木村浩訳、岩波文庫版「二重人格」小沼文彦訳を主に参照した。)

バタイユはニーチェとともに、真面目であるべき思索に至高性という

狂気を持ちこんでしまった。それは飼ひ慣らせない狂気であつたのだ(フーコーがプランシヨ論で語つたような狂気だ)。デリダは「エクリチュールと差異」(法政大学出版局)で、「使用道のない否定性」というバタイユの言葉を引いて、至高性はヘーゲルの弁証法を徹底したものと説く。弁証法の否定という運動によって、ついに絶対精神という神の外にまで出てしまつたものこそ至高性だというのだ。

否定によって、ヘーゲルはついに

にもでもない否定性を導き出した。つまり神である。そして空無の神によって支配された世界という像をいったん完成させる。これこそが否定神学によって構築された、逆説的だが、まさに有用なこの世界そのものなのである。

「グローバル」な資本主義の正義に覆われたこの世界は、根柢のない有用な労働の義務と有用な資本によって回っている。空無の神が装いを改めた資本と労働の義務というなものでもないものに我々は支配されているのだ。バルトが指摘した空無としての天皇制はこの一変奏であつ

■プロフィール(なかにま・ようじ)一九七〇年生まれ。男性。大学での専攻は哲学。私にとって哲学はライフワーク。自分の生の仕事と感じている。出版社勤務を経て、目下のある某大学図書館で働くこととSOHO的生活の両立を模索中。ただ本来的な目標は、そうした生活を見つめつつも超えていき(?)。パートナーとともに「茶飲みジジババ」になることにある。



宮山昌治

た。日本の資本主義の成功と天皇制はもちろん深い関わりがある。

しかし、なんとヘーゲルはこの

よつて、まるごと否定してしまつたとバタイユはいうのだ。否定性の神をも否定してしまつたことで、これまでにつくりあげた有用な世界そのものを否定する。これこそ否定の完成なのだ。そこで開けた無用なものこそが至高性だというのだ。有用な世界をニーチェのごとく哄笑し、「使用道のない否定性」で否定する。なんと爽快な思想であろうか!

だが、現実には有用性を無視することはできない。核兵器の出現はバタイユに相当な衝撃を与えたようである。現代の至高性は核戦争による全滅もありうるということになった。核戦争後の地球が至高性では、それはバタイユの望む明るい哄笑には値し

くないよ。

3 『復讐の白き荒野』笠井潔、原書房
笠井潔のカケルシリーズ以外の本格推理小説。笠井潔と島田荘司との対談「日本型悪平等起源論―もの言わぬ民の真相を推理する」のなかでもこの本について触れている。もと左翼の方にも右翼の方にもお勧めの本。二転三転とあつと驚くこと請け合ひ。結末を推理出来た方は日本の右翼、左翼問題に精通している方か? 笠井潔の推理小説の中で一押しの一冊。『バイバイ・エンジェル』をはじめとする「カケル」シリーズを読んだ方にも是非お勧めします。私は講談社版を読みました。

■村田豪

1 『仮面の告白』三島由紀夫、新潮文庫
現実と観念の乖離をイロニーによって乗り越えるという三島の文学意匠の、その動機がいわば語られているとみなせる初期傑作。感動的。

2 『悪徳の栄え』マルキ・ド・サド、澁澤龍彦訳、河出文庫

「自然」と「自由」の、折り合いのつきがたい二つの根源性に突き動かされる、性と哲学のオルギア。カントの第三アンチノミーの文学的解決!

3 『探究―柄谷行人、講談社学術文庫

それまでの形式化の問題を捨て、著者がウイトゲンシュタインの言語論にとりつかねばならなかったのはなぜか。「トランスクリティーク」が著された今だからこそ、その意味がようやく分かるのかもしれない。

■田中俊英

1 『ナイン・ストーリーズ』J・D・サリンジャー、新潮文庫

2 『レイモンド・カーヴァー集』、中央公論社

3 『差異と反復』ジル・ドゥルーズ、河出文庫

僕は現在三十八才。上記の本は順に、1「自殺」、2「コミュニケーション」、3「自我の崩壊」がテーマであり、それらに沿って確実に年を重ねてきました。

■黒猫房主

1 『日本のナショナリズム』(吉本隆明全集 著作集 13巻) 吉本隆明、勁草書房
大衆を敵にしない思想、そして徹底した反スターリズムである「自立思想」と「大衆の原像」の原点がここにある。同じく吉本隆明

の「転向論」と併せて読むとよい。

2 『駆け込み訴へ』(『晩年』所収) 太宰治、新潮文庫

「背信とは何か」を巡る否定神学? 13枚の銀貨で売ったユダだからこそ、いっそうイエスへの愛が深いか、あるいはエゴイズム。併せて遠藤周作の『沈黙』もお勧め。踏み絵を考案したのは、転向した信者だろうか。その踏み絵を受け入れるイエスの愛の深さはカソリック的(普遍的)か?

3 『セヴンティーン』(大江健三郎全集 品3巻) 所収) 大江健三郎、新潮社

中学生の私に文学好きの理科教師が大江健三郎の存在を教えた。それで初めて読んだのが十四歳の春、打ち震えた。分からないままに性と政治が二重に押し寄せてきた。二度目に読んだのは一九七〇年の十七歳を迎えた年。その年に三島由紀夫が割腹自死した。そして二十歳前になって同書一部「政治少年死す」(事実上の発禁扱い)を入手して読む。ラストシーン、主人公が「純粹天皇」への愛情を焦がす至上の瞬間、その自死の描写が脳裏に焼き付いている。政治とエロティシズムの結託がよく表出されている初期傑作。ちなみに十七歳時の大江健三郎は「掌上」という新制高校の文芸雑誌の編集後記に、十七歳には十七歳の文学があり得ると書いていた。

■MAO

1 『カニバリズム論』中野実代子、福武文庫

2 『ヒトはなぜヒトを食べたか(原題: 食人族の王―文化の起源)』マーヴィン・ハリス、早川書房

3 『肉食という性の政治学』キャロル・J・アダムス、新宿書房

小学校高学年の頃から陶酔を伴う死への憧れと恐怖にとりつかれる。「死んだらどうなる(される)のか」という妄想は死ねない自分にとってはある意味で逃げ道であつた。死に関する書物、写真は世に溢れている。戦車に轢かれてミンチになった青年。家族の死を惜しみ、焼いて食す民族。屠殺所で解体され、バケツにつっこまれた豚の内蔵に群がるハエ。ゴミ袋に入れられた堕胎児。昨日まで「牛・a cow」だった動物がある瞬間から「牛肉・beef」にモノ化される過程。中でも肉食は私の心を魅きつける。禁忌とは、行われて止まない行動に設定されるからだ。起因が悲惨な飢えや政治的判断であらうと、敵意や愛情であらうと。

一読多読

ない。そうなるに至高性を謳うばかりではいられないわけだ。バタイユは『至高性』で、この否定ならざる殲滅をなんとか起こさずに、有用な世界を維持しようとしているのが冷戦状態だと規定する。しかし、これを肯定することはできない。

バタイユが『至高性』で、至高性さえ望めなくなった悲惨な世界の現状を嘆いたのは五十年近く前だが、冷戦こそ終わったものの至高性の望みがないことはまったく変わっていない。まさにテロ以降のアメリカが、グローバル資本主義を全否定しようとする動きを必死で封じ込めにかかっているのが現状だ。最後の否定を防ぐのは相も変わらず、核による維持である。しかし、それはあくまで有用な世界の保持でしかない。資本と有用な労働の義務という神は否定されずに世界を支配しつづける。

バタイユはこの閉塞の事態に腕を拱いていたわけではない。『至高性』では、一つのヒントを呈示している。それは「理性的な贈与」である。しかし、この世界観には一つ問題がある。バタイユの述べた「使用道のない否定性」は、そもそもポトラッチであった。ポトラッチという贈与は見返りを期待できない。だからこそ「使用道」がないのだ。この贈与に對置されるのが有用な交換である。デリダが「死を贈与する」で主張するように、ポトラッチの贈り先は当然見返りを期待できない他者、つまり幽霊であろう。ここでいう幽霊とは声なき声をあげる無数の生きながらに死者にされている生者であり、祀られていない死者でもあり、また動物でもあろう。有用な世界には見向きもされていない他者である。かれらに見返りのない贈与をしなければならぬ。

デリダが

他者と呼んだ者こそこの幽霊であった。われわれは他者に対して贈与をする責任があるのだ。しかし、デリダは、贈与はつねに来るべき未来に存在するという。今すぐにはなく、永遠に完成しつづけるものなのだ。それはデリダも指摘する

ように、犠牲を永遠に要求しつづけることを避けられない。さらに、デリダの他者論はレヴィナスに多くを拠っている。レヴィナスの絶対的的他者への責任は自らの口に含んだパンをもぎとって他者に与えるという壮絶なものであり、憎悪の渦巻く世界において、どれだけ共有できるかはきわめてあやしい。

世界の

大勢は明らかにこれと逆の動きをしてい

特集「一読多読」

ありふれた平凡な自分とありふれた平凡なコトバ

本紙編集部からいただいたお題は「あなたのお薦めの本、印象深い本三冊を挙げてください」とのことである。思えば、書店に勤務していた六年間、幾度となくブック・ガイダンス的なフェアを展開したが、それはまさに私自身の「思い込み」と「独りよがり」と「無理強い」以外の何物でもない、きわめて傲慢な棚構成であった。上司からは「客の顔を見ていない」といつも叱られ、あきれられ、常連客の嘲笑を買っていた。しかし、それでいて、いざ「あなたのお薦めの本は？」、「好きな作家は？」などと訊かれると、とたんに答えに窮して口ごもり、何も答えられなくなるのが常だった。

そもそも、本などというものは、わざわざ人に薦められて読むものではないし、何処かの偉い先生が誉めていたからといって読むに値するものでもないだろう。リアルな対人関係において、いくら言を尽くして他者に伝えようとしてもこぼれ落ちてしまうもの、どうしても言い表すことのできない何か、そして人間の心の裏の内に秘められたとてつもなく醜

る。それは見返りのある贈与、つまり交換でしかない資本主義システムの支配のなかでは投資価値のないものは切り捨てられるのが当然だからだ。パンを与える価値のない者にはパンは与えられないのだ。バタイユの『至高性』はそういった交換と調停に頁を割いてはいない。その速度がバタイユの狂気の魅力であって、また限界でもあったのだらう。しかし、いまだ率直にあって、私にとってこの書物の魅

い何物かが、「恥ずかしさ」を引き受けるなから、やむにやまれぬ気持ちと共に文字にアウトプットされ、それが「世に問われる」べき何らかの必然性(ないしは無意味性)を帯びて活字となり、さらに時空を超えて未知の読者へ、それもたった一人かもしれない読者のもとへと漸く届けられるといった性質のものであろうと私は思っている。(余談ながら、それゆえに私は、本を「消費プロダクト」としてのみ資本の論理に還元せんとする再販制撤廃論には反対である。)

それにしても、「自分の生き方に決定的影響を与えた三冊」なんてものは無いし、「好きな本」「嫌いな本」など、その日の気分によってコロコロ変わるといっても正直なところだ。しかし、そうは言っても一旦引き受けてしまった以上、原稿を書かないわけにはいかない。そこで、反則技で恐縮なのだが、今日現在、何となく自分の心の通底に流れているとも言える三つのテーマを提出し、それぞれのテーマの中

力は褪せない。それこそが私の限界なかもしれないが。至高性の失われた不安はいまだ継続している。(投稿)✪

■プロフィール(みややま・まさはる)一九七二年生まれ。英語の塾講師。大学時代は専門(文学)の授業にはほとんど出なかった。論文という公的な制約のある形態の文章は不得手である。読むのも書くのも。無才の為せるわざか。知的手淫(大杉榮)を好まず、暗い笑いを旨とします。

安喜健人



で三冊ずつ、つまり九冊の書籍をご紹介することで何とかごまかしを許していただきたいと思う。

■「無知」と「絶望」

・永山則夫『無知と涙』(合同出版、一九七一年。増補新版一九九〇年、河出文庫)

「死のみ考えた者がいた。えたたたたたたたた。その者は若かった。青かった。たたたたた。自殺ではなくして。死があった。汚穢汚

穢汚穢
成人になる前に 死を選んだ 愛嬌愛嬌
嬌
なれど死ねなかつた 相子相子相子勝負なし」

永山の吐き出したコトバに初めて触れた時、私は嬉しかった。生きていてよかつたと思つた。
衣食住足りて、愛情に満ちた両親に育てられ、郊外のベッドタウンで何一つ不自由のない生活を送り、「典型的なプチブル坊ちゃん」として人並みのありふれた思春期を迎えていた十代半ばの頃。しかし私は、とてつもなく「不自由」であった。自分自身に対してはもろろんのこと、世の中の現実のとにかく何もかも完全に嫌悪感を催していた。自分がこの世に存在しているという現実には、とても耐えられなかつた。「自由」でありたいと願う一方で、私はあまりにも「無知」であった。そう、衣食住の全てに何の苦勞も無かつたが、何一つとして自分が生きていく上で必要なコトバを持つていなかつたのである。潜在的には、今にも張り裂けんばかりの叫びにも似た心情でもって強烈にコトバを欲してはいたが、どうしたらよいのか分からぬまま「コトバの無い世界」に生きていた……。勿論のこと、コトバの持ち合わせが無かつたので、その思いを表現する手だても全く無かつた。

「その反面、明るく生きたい、笑って生きたいと胸の中で連呼していた。私は生きた茫漠の世間に」
「こんなセンチメンタル・ボーイを笑ってくれ……………じゃ、またね。」
私は、永山の「青臭い」コトバに爆笑し、泣いた。そして、末恐ろしくなつた。
「私は四人の人々を殺して勾留されている一人の囚人でありませう。」
殺しの事は忘却は出来ないであろう一生涯。しかし、このノートに書く内容は、なるべくそれに触れたく無い。

何故かと言えば、それを思い出すと、このノートは不要用(ママ)に成るからである。」
永山は、獄中で覚えたコトバによって、

世界を取り戻したのか、はたまた世界を
獲得したのか？(そもそも、コトバの獲得
は世界の獲得を意味するのか。そして世
界の獲得とはいったい何のことか?)

いずれにせよ、当時の私は、田村隆一の
「言葉なんか覚えるんじゃないか」(註1)
というつぶやきなどからはほど遠い場所
で生きていた。取り戻すべき世界が何な
のかさえも何ひとつ分からず、ただただ、
現実の全てに怯えていた。そして、「人を
殺してしまいたい」衝動にかられ続けて
いる自分がとにかくどうしようもなく恐
ろしかった。

私は永山のコトバとの出会いによって
「殺人者」となることを免れたが、しかし
それから十余年が経ったある日、永山則
夫はあたかも「超越神」であるかのように
振る舞う国家権力によって、突然その生
命を奪われ、口を封ぜられた。

「八月一日(金)の朝、九時前ごろだったか、
隣の舎棟から絶叫が聞こえました。(略)ま
さか処刑場に引き立てられた人が上げた声
ではないだろうと案じていました。」「ほ
くが耳にしたのは、隣の棟で、何かに怒り、
あるいは抗議して上げられた大声でした。
ちよつと声の調子が高かったというよう
なものではなく、短い時間でしたが、振り絞
った声に聞こえました。」

同じ東京拘置所に収監されている死刑囚、
大道寺将司さんによる証言である(註2)。
「いわば、もつとも殺されてはならない
人びとを殺した」(註3)殺人者永山則夫は、
「一般刑事犯」として捕らえられたが、獄
中で「政治犯」へと変貌を遂げた。そして
日本の国家権力によって、生かしてはお
けない、殺されなければならない存在と
して、「政治犯」として殺害された。

永山は、獄中で獲得したコトバによつ
て「人を殺めることの愚」を捉え返し、そ
れと同時に「政治犯」となったのである。
それゆえ、日本国家によって虐殺された。
事件の被害者との相関関係において、死
を宣告されたのは断じてない。国家権
力によって不都合な存在とされる人間は
皆、「政治犯」なのである。(いわんや、全て

の「死刑囚」は、被害者との関係性にお
いてではなく、「人を殺す」国家権力との関
係性において「のみ」、死刑が宣告される
のである。奇しくも本稿執筆のさなか、
野蛮な暴力機構によってまたしても二名
の死刑囚が虐殺された二〇〇二年九月十
八日の日に、この事実だけは声を大にし
て指摘しておきたい。

・石原吉郎『望郷と海』(筑摩書房、一九
七二年)

「絶望の虚妄なるは希望の虚妄なるに等
しい」(註4)という魯迅のコトバが好きだ。
しかしながら、私たちは日常の中でしば
しば壁におち当たっては、あまりにも簡
単に絶望し、断念する。「死の砂漠を行進
するペンギンのように無邪気な瞳のロニ
ーは「絶望がみえる」と言った」(註5)かど
うかは知らぬが、絶望、絶望、断念は余り
にもありふれたもの、使い古されたコト
バだ。

では、そもそも「断念」とはいったい何か。
ひとは断念できるものなのかどうか。い
や、ひとは断念する権利を誰に対しても
つか。そのような権利がもしあるとす
れば、それは果してことばになりうるも
のなのかどうか。(内村剛介) (註6)。

シベリアの強制収容所での極限の生活
からは遠くかけ離れた、モノに満ち溢れ、
エア・コンディショナーが完備された
「先進」国の街の一室で、私は夜半、しばし
ば石原のコトバの断片を繙いては、精神
の安定を図り、落ち着いて床に就く。
「この、無意味な世界を生きるに値する
ものとするということ、無意味を意味
におきかえることではない。無意味とた
たかいつづけることである。」

「己れの絶望を中絶して、まず『聞く』と
いうこと、まず『耳をかたむける』という
ことが始まらねばならぬ。」

「あるとき、僕はいつのまにか、拒絶の姿
勢をうしなっていることに気づき、大き
な衝撃を受ける。その時僕にとって、世界
は一時に明瞭になる。僕はひとつの感動
をこめて、世界をもういちど拒絶するの

だ。」

・セリーヌ、生田耕作訳『夜の果ての旅』
(中公文庫、一九七八年)

若気の至りなのであろうが、私も人並
みにセリーヌが好きだった。気に入った
セリフは頁数も暗記して、空で言う
ことができる。

「腰抜けの脳みそに血がめぐるためには、
そいつの身にたくさんのことが、それも
よっぽどつらいことが振りかからなくち
やだめだ。」(上巻三六頁)

「甘い考えは捨て去ることだ、人間は互
いに語り合うなものも持つてはいない、
めいめい互いに自分の苦勞を口にするだ
けだ、知れたことだ。」(下巻八十頁)

「僕らが一生通じてさがし求めるものは、
たぶんこれなのだ、ただこれだけなのだ。
つまり生命の実感を味わうための身を切
るような悲しみ。」(上巻三四頁)

そしてまた、下巻末尾に収録されてい
る生田耕作による解説もイイ。疲れた時
にオススメ。



■「生きる」こと「殺される」こと「社
会」

・東アジア反日武装戦線への死刑・重刑
攻撃とたたかう支援連絡会議編
「あの狼煙はいま」(インパクト出版会、
一九九六年)

一九七四年八月三十日、東京丸の内の
三菱重工本社で時限爆弾が炸裂し、通行
人八人が死亡、三八五人が重軽傷を負う
という事件があった。当然のことながら、

マスコミは「非人間的」な「血も涙もない
爆弾魔」によって引き起こされた「無差別
大量殺人」だと書き立て、彼らをそのよう
な行動へと駆り立てた社会的背景には一
切触れようともしなかった。(念のために
付け加えておくと、爆発の予想外の威力
に最もおののいたのは実行者たち自身で
あり、多数の犠牲者の発生は全く想定し
ていなかったという。)

「植民地人民の血と累々たる屍の上」に
「繁栄と成長」を遂げ、「更なる収奪と犠牲
を強要」する「植民地主義企業への攻撃」
を目的とした事件の実行者である左翼青
年グループたちの心の軌跡を丹念に描き
出した優れたノンフィクション小説とし
て、松下竜一の筆による『狼煙を見よ』(河
出書房新社、一九八七年)がある。優れた
作品であるには違いないが、著者の実行
者への思い入れが強すぎるあまり、また
時代的制約もあって、事件当時の「第三世
界主義」「武装闘争主義」を思想的に内側
から批判的に捉え返す作業がきちんとな
されているものであるとは言えない。ま
た、そのようなことを意図して書かれた
ものでもない。

一方、一九九六年に刊行された本
書は、所収の対談「『第三世界主義』
を越えて」の表題からも分かるよう
に、事件から二十余年の歳月を経
て、この困難な作業に正面から取り
組んだ内容である。

三十年近くにわたり、彼らに対す
る「救援」なり「支援」なりに何らか
の形で関わり続けてきた論者たち
の、それぞれにかなり温度差がある思想
的実践の積み重ねは、世紀が変わってま
た新たな形でとてつもなく突出した「暴
力」が顕現化して世界を支配しようとし
ている今日、私たちに多くの示唆を与え
てくれるものであろう。

また、「事件の被害者との関係性にお
いて存在する自分」(註7)を凝視し続けてき
た実行者たちの生の軌跡を辿る上にお
いて、上記の松下作品は必読本であるが、実
行者ではないにもかかわらず、不当な逮

捕と長期勾留を余儀なくされた荒井まり
子さんが獄中から出版したエッセイ(註8)
とともに読む者の魂を深く突き動かさず
にはおれない。

なお、ついながら、死刑制度の問題に
ついて「彼らはいい人なんだ、だから殺
すな」というロジックではなく、「本当の
ろくでなし」の死刑囚であつても殺すな
ということはどういうふうに向うのか、
「誰が」ろくでなし」と決めることができ
るのか(崎山政毅(註9)を考え続けるこ
となしには事の本質には決して迫ること
はできないであろうことも指摘しておき
たい。

・太田昌国「ペルー人質事件」解説のた
めの21章(現代企画室、一九九七年)

いわゆる「9・11」以後、アメリカ追従
のタカ派言説が跋扈する一方で、とにか
くアメリカの悪口さえ言っておればよい
かのような無責任な言論も巷間溢れてい
るような感触がある。

私たちが生きている「日本」という国家
は一体何者であるのか、そして、遠く離れ
た国に生きる人々との関係性においてい
かなる暴力を振るっている存在であるの
か。問題の所在を冷静に捉え返す上にお
いて、フジモリによって虐殺されてしま
ったMRTAの青年兵士たちと「人質」と
して一二七日間にわたって対話を重ねた
小倉英敬氏の『封殺された対話』(平凡社、

クルディスタンを訪ねて(仮)

—トルコに生きる国なき民—
松浦範子 文・写真

A5判変型上製 288頁 予価2500円
2003年2月刊行予定
ISBN4-7877-0300-5 C0036

世界最大の国なき民、クルド民族。50万に及ぶ彼らのシ
地「クルディスタン」は、トルコ、イラン、イラク、シ
リアなどの国境に分断されている。クルディスタン
を訪ね続ける写真家が綴った人々の文化、日常生活、
背負い続ける苦難、そして出会いと旅の記録。

新泉社

東京都文京区本郷2-5-12
TEL:03-3815-1662 FAX:03-3815-1422
E-mail:shinsensha@nifty.com

二〇〇〇年)と共に必読の書。

・久下格『謠子追想 人は愛と闘いに生きられるのか』(教育史料出版会、一九九七年)

安易な絶望と戯れるのではなく、「悲愴な孤独」に溺れるのではなく、「硬質な輝きをもった恒星のような孤独」を手に入れた、「朗らかに生き」るなかの「力強い決意」に書物を通して接したいといつも思う。

〔一〕内、大竹昭子氏の本(註10)より引用。久下氏の著作と直接の関係はない。)

本書については、本紙の姉妹誌「Webカルチャー・レビュー」に書評を書かせてもらっているの、そちらをご覧いただければと思う(http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/re15.html#15-3)。

■「本」をめぐる出会い

・雑誌「インバクシオン」(インバクト出版会、隔月刊、一九七九年創刊)

隔月刊ペースを維持しながら、ほとんどたった一人の編集者の個性とその場に集う人々たちによって、二十余年にわたって発行され続けている手作り雑誌である。

この雑誌の「良心的」な読者や執筆者であつても、おそらく多くの人は同誌を「運動のメディア」として了解しているのではないだろうかと思われる。しかし同誌は、「運動メディア」または「運動するメディア」として存在することがあつても、「運動のメディア」であつたことはかつて一度たりとも無かつたと思う。

私は毎号の「編集後記」を楽しみに、定期購読を続けている。

・早川義夫『ぼくは本屋のおやじさん』(晶文社、一九八二年)

「ものを書くという行為は、自分を正当化するためにとか、自分を売りこむためにとかいうことではない。書くことによつて、もしかすると自分が不利になるような、自分の醜さがさらけ出してしまうような、どんなに外に向けて書いたものでも、

自分にはねかえつてくるようなものではないければならない。どちらかといえば、書かなければよかつたと思うようなものが、本来、書かねばならないことなのではないだろうか。」

何の予備知識もなく、ひよんなことから本屋勤めを始めることになってしまった私にとつて、とりあえずのノウハウ本として非常に役立つ本だとのみ言っておこう。

ただ、「返品作業」についての小話が、まさか十五年の歳月を経て「うた」として甦るとは想像もつかなかつたが……。

「なにかが足りない、足りないといった感じで、まるで、自分の駄目な部分や、寂しさを補うかのように、ものを増やしたりするけれど、本当は、足りないのではなくて、よけいなものが多かつたのだ。いつも、そう思う。」

・渡辺美知子聞き書き『元氣凛々日本の小出版』(柘植書房、一九九三年)

「堂々の28人に聞く2420分」と銘打たれた本書が刊行された一九九三年当時において、当然のことながら小零細出版社の現実はずでに相当厳しいものであつた。

「こういう出版社は、やっぱり大人が二人食べられない構造なんです。」(小汀良久氏)

「日々しんどいと、人間アホになるのかね。ただ、この商売をやめたいと感じたことはない。手形一枚切るたびに、白髪が一本増えるけれど。」(西村祐祐氏)

本書に紹介されている「小出版」の世界に畏れを抱きつつも強烈に憧れ続けながら歳月は流れ、気がついたらなぜか、私自身がその中に飛び込んでしまつていた。全くもつてアホそのものである。

本書に出てくる人の何人かは、今や親しいお知り合いの関係にあるし、なかにはどういうわけか私の隣の席で働いておられる人もいたりする。まつたくもつて、人生とは何がどうなるか、分かつたもんじゃない。しかしまあ、ここに紹介されている出版

社のうち、いったい幾つの社が無惨にも潰れてしまったことだろうか。そしてまた、すでに故人となつてしまつた人もいる。

「どんな分野の企画でも変わらない鉄則がひとつだけあります。それぞれがつくりたい本をつくる。そして、それをペイできるように売る。でも、バリケードの向こう側には行かない、社会を変えたいという観点でつくらなくてはならない。体制・支配者側には与しない、という鉄則です。」

「われわれみたいな『出版業』は、そこにいるヤツがどれだけツツパルかですよ。それ以外になにもない。」(前出、西村氏)

「見よ！ この心意気。花も嵐も踏みこえて、ゆけ、ゆけ、ほくらの小出版！」(宣伝オビ)★

(註1) 田村隆一「帰途」(初出『言葉のない世界』昭森社、一九六二年)

(註2) 大道寺将司「死刑確定中」太田出版、一九九七年

(註3) 池田浩士「死刑」からすべてが始まる『文藝別冊 完全特集永山則夫』河出書房新社、一九九八年

(註4) 魯迅「野草」岩波文庫ほか

(註5) 佐野元春「NYC 1983-1984」[Visitors] インナー、エビクソン、一九八四年

(註6) 内村剛介「失語と断念 石原吉郎論」思潮社、一九七九年

(註7) 大道寺将司句集「友へ」ばる出版、二〇〇一年

(註8) 荒井まり子「子ねこチビンケと地しぼりの花」(径書房、一九八六年) (改題「未決囚十一年の青春」現代教養文庫)

集 死 明

富哲世著

A5判・和綴・函入・定価一八〇〇円十税

いのちの奇み。死の明るさ。言葉はほころび、はるけさは減りつつづける。うたは、費の身近きである。

窓月書房

〒533-0022 大阪市東淀川区7-5-23-702 TEL/FAX: 06-6320-6426

■編集後記

★今回の特集で思つたこと。寄稿者それぞれの紹介する「自分に影響を与えた本」そのものが興味深いのはもちろんだが、各人の視点や距離のとりかた、自分が今までに出逢つた本という対象を語るその語り口が、その人の本質を表しているような気がしておもしろかつた。内田樹が「寝ながら学べる構造主義」(文春新書)で、ロラン・バルトの思想を「ことばづかいで人は決まると言つて」いる、と大胆にもひとこと要約していた。これを敷衍して、寄稿者の(ことばづかい)にこそその人が現れているというのは穿ちすぎだろうか。

★もうひとつ思つたのは、やっぱり本読みに王道な感じがしないこと。つまり、本来本読みに常道なるものがあつて、その道のプロがいるなんてことはないんだということ。そんなふうなことを考へていたら、あのスーパーエディター、ヤスケンこと安原頭が、余命ひと月であることをみずから発表し、書評や日記を書き続けているのをウェブで知つた。この人はたしかに本読みのプロといえる数少ないひとりでだろう。病に倒れてもお、彼の読みにたいする姿勢には並々ならぬエネルギーを感じる。この日記からはしばらく目がはなせそうにない。

★また内田樹は、「知性がみずからに課すいぢばん大事なこととは、実は、「答えを出すこと」ではなく、「重要な問いの下にアンダーラインを引くこと」なのです」ともいっている。どうやら今回の「La Vue」は、執筆者各人の「大きな問い」の集積であるようだ。

★概して人文書が売れない。期せずして、紀伊國屋書店さん発行の「KNOKUNYA TIMES」の読書週間号では、「私の人生に最も影響を与えた一冊」を特集している。まあ、特集として人が考えることは同じようなものであるが、各界の著名人の回答(99人)がコメント付きで掲載されている。

★たとえば、構造主義生物学者で全共闘世代の池田清彦氏は「望郷と海」(石原吉郎)を挙げていて、本紙「La Vue」においても、三十歳の安喜氏がこの本に思いを巡らしている。私の記憶では、「開かれた言葉」(長田弘)など同じ函入りの筑摩評論シリーズとして刊行されてはいたはず。その後、ちくま学芸文庫になつたが、それも現在は品切・重版未定となつていて、この品切ということに時代の移ろいを見る思いがあるが、いっぽうで確実に読み継がれていくということも安喜氏の文章には顯れている。石原氏は、声の大きな詩人で永らく筑摩書房のPR誌「ちくま」の編集長を務めていたと聞く。

本紙支援会員募集

本紙は、京阪神地区の主要書店(一部東京)・図書館・文化センター等に配布し、配布状況は順次ウェブ(http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe.lavue.html)に掲載しております。本紙は、市民の相互批評を目指す媒体として、読者の方々の「投げ銭」及び「木戸銭」というパトロンシップによって、非営利的に発行しております。頒価100円は、読者の方々の「投げ銭」の目安です。また、本紙を安定的に発行するために、支援会員を募っております。年会費一口600円(13号~15号までの定期購読料+送料+投げ銭)からの「木戸銭」を申し受けております。■「投げ銭」「木戸銭」は、切手にても承ります。■郵便振替:「るな工房」00920-9-114321